



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4164 号 2018.1.25 発行



知事選 障害者投票しやすく 読売新聞 2018年01月25日
山口市内の全投票所で導入されたコミュニケーションボード

2月4日投開票の知事選に向け、障害を抱える有権者が投票しやすい環境を整えようと、各市町の選挙管理委員会が知恵を絞っている。2016年4月に障害者差別解消法が施行されたこともあり、イラストを指さして意思疎通を図るボードや記載台の滑り止めシートを導入するなど、投票所のバリアフリーに向けた取り組みが広がっている。(平島さおり)

山口市選管は今回の知事選から、聴覚や言語能力に障害がある人が指をさして質問できる「コミュニケーションボード」を導入。県内19市町では初めてで、期日前を含む市内110か所全ての投票所に置く。

ボードには「入場券がありません」「候補者が分かりません」など、投票の際に想定される質問をイラスト付きで記載。職員は筆談やジェスチャーなどで対応する。

昨年10月の衆院選で、聴覚に障害がある女性と投票所にいた職員が十分に意思疎通できなかった事例があり、市選管が対応を検討。ボードを導入していた群馬県選管に問い合わせるなどして、ほぼ同じものを準備した。市選管の担当者は「これまで投票に行きづらかった人も多かったかもしれない。改善を進めたい」と話す。

障害者差別解消法では、障害者がサービスを利用しやすいような「合理的配慮」を行政機関に義務づけている。県内市町の各選管では以前から、車いす利用者用に通常より低い記載台を配置したり、出入り口にスロープを設けたりしているが、同法施行後、さらに取り組みが進んでいる。

田布施町選管は昨年の衆院選から、手が不自由な人が用紙を押さえなくても片手で記入できるように、一部の記載台にゴム製の「滑り止めシート」を導入。利用者から「使いやすい」との評判もあり、知事選に向けて50枚を追加した。山陽小野田市選管は視覚障害者や高齢者らが投票しやすいよう、記載台につえを置けるホルダーを設置している。

県身体障害者団体連合会の秋山史之事務局長(57)は「こうした配慮が進んできていくことは歓迎できる。取り組みが県下全域に広がってほしい」と話している。

何が出るか分からない 2月にごちゃまぜ新喜劇 神戸新聞 2018年1月24日

さまざまな障害のある人と健常者が共に参加する「ごちゃまぜ新喜劇」の発表会が来月2日、神戸市内で開かれる。幅広い世代の十数人が出演する予定で、放送作家の砂川一茂さん(58)＝大阪府枚方市＝が参加者の個性を踏まえて台本を執筆。砂川さんは各地で同様の試みを重ねており、「想定外の出来事も吸収する喜劇の力を味わってもらえたら」と話している。(新開真理)

「何とか山小屋にたどり着いたけど、寒いわー」

「すいませーん」

「あっ、助けに来てくれた！ はいはい」

しかし扉を開けるとー。

救助を待つ遭難者の元に呼んでもいない人が次々やって来る喜劇「山小屋」を練習する声が、灘区民ホール（神戸市灘区岸地通1）の一室に響く。

「ごちゃまぜ新喜劇」を練習する出演者ら＝神戸市灘区岸地通1

演じるのは、神戸大大学院人間発達環境学研究所が同ホール内で運営する「のびやかスペースあーち」に通う障害者や学生ら。思い思いに展開されるリアクションに、砂川さんと、一緒

に活動する脳性まひの中川佑希さん（28）＝大津市＝が応じていく。

砂川さんらは2011年から神戸市や兵庫県尼崎市の作業所などで、障害のある通所者らが登場する喜劇の上演を続ける。そのきっかけとなったのが、阪神・淡路大震災後に神戸市内の仮設住宅を訪ねて喜劇を披露した際の経験だった。

終了後の交流会で、おばあさんの身の上話に参加者はプロの喜劇よりも大笑いしていた。それを見て「一般の人が演じる喜劇の可能性を感じた」という砂川さん。その後の活動を通じて演劇と発達障害との関わりなどを研究する同大の赤木和重准教授と出会い、「あーち」の運営に携わる津田英二・同大教授の協力も得て「ごちゃまぜー」に臨むこととなった。

「面白さと、何が出てくるか分からない緊張感。どちらも感じながらやっています」と中川さん。出演する稲田遼太さん（13）＝神戸市灘区＝は「みんなに見てもらえて、自分もいっぱい笑えるのが楽しい」と声を弾ませる。

同ホール3階で午後7時開演予定。観覧は先着10人で申し込みが必要。無料。申し込み、問い合わせは赤木准教授にメール（akagi@pearl.kobe-u.ac.jp）で。



画像認識技術で説明文を生成 東大の牛久講師

日経産業新聞 2018年1月25日

深層学習（ディープラーニング）の可能性を初めて明らかにし、現在の人工知能（AI）ブームのきっかけとなった画像認識技術。この分野の最先端で世界としのぎを削っているのが東京大学講師の牛久祥孝（31）だ。競争が激しい分野で日本の存在感を高めるため、国内の研究者が力を合わせる必要性を強調する。

うしく・よしたか 1986年東京都生まれ。2014年東京大学大学院情報理工学系研究科博士課程修了、NTTへ。16年から現職。12年のILSVRCで2位。電子情報通信学会PRMU研究奨励賞を受賞。

東京大学講師 牛久祥孝氏



「小さい頃からドラえもんを脳につくってみたいかった」。牛久は現在の研究にもつながる関心を端的に言い表した。高校時代にテレビの人気番組「全国高等学校クイズ選手権（高校生クイズ）」で優勝し博識ぶりを示す一方、コンピューターのシューティングゲームや線に沿って動くロボットなどをつくっていた。

大学の専攻を機械情報工学科にしたのも「ロボットのような目に見える物体と情報処理の両方に興味があった」ためだ。その中でも、物体が何なのかを識別するのに使われ、コンピューターの「目」とも言われる画像認識に引かれ、足を踏み入れた。

2012年、カナダ・トロント大学教授のジェフリー・ヒントンのチームが深層学習を使った画像認識技術を披露し、圧倒的な精度で優勝した世界的な画像認識

のコンテスト「ILSVRC」に牛久の研究チームも参加していた。従来の機械学習を用いた認識技術で挑んだチームの中では最高の2位となったが、トロント大には大きな差をつけられ、衝撃を受けた。

衝撃には2つの理由がある。1つ目はこれまで1%ほどの精度の改良を競っていた中、差が10%もあった点。もう1つは精度向上に寄与したブレークスルーが「使い物にならない」と思っていた人の脳を模した「ニューラルネットワーク」だった点だ。

画像認識技術で「大きく水をあげられた」とがっかりしたものの「ニューラルネットへの拒否反応はなかった」。画像関連の研究を続け、深層学習の膨大な計算に不可欠な画像処理半導体（GPU）の利用環境が整うと、牛久も深層学習を使い始めた。

画像認識の研究は現在「米国の1強」との見方が多い中、「米国に追いつけていないだけでなく、中国にも抜かれている」と危機感を強める。グーグルなどの米国企業とは予算規模が違うため、計算機の能力が必要な研究は分が悪く、アイデア次第で勝機のある画像認識の関連分野を開拓している。



A yellow train on the tracks near a train station.

画像を説明する文章を自動で生成できる

多くの関連分野の中でも11年から続けているのが画像の内容を説明する文章の生成だ。画像とその説明文のセットをどのように学習させれば、未知の画像であっても適切な説明文を生成できるかを研究している。視覚障害者向けの支援や検索エンジンの改良に応用できるという。

努力が報われて、16年に開かれたイラスト画像に関する質問文の答えを生成するコンテストでは、同技術を応用し世界一となった。

今後、取り組もうと考えているのが、文章の内容を表す画像や動画の生成だ。画像と文章をひもづける点は現在の研究と共通しており、親和性は高いと読む。画像や音声などの知覚情報を加味した対話システムの研究なども視野に入れる。

さまざまな実績を上げているが、自分を含めた国内の研究者が世界で存在感を発揮するには、研究者同士の意見交換が不可欠と考える。「個人の能力には限界がある。いろいろな人を巻き込んで国内のコミュニティーを活性化させたい」と強調する。

2年間、研究員として働いたNTTを辞め、再び東大に戻ってきたのも学生の可能性を信じているからだ。教育した学生が戦力になれば、1人で研究するよりも研究の幅が広がるとみる。

教育した学生が研究者にならなかったとしても「AIや深層学習の技術に理解のある人材が官民に増える」と前向きにとらえる。

チームプレーを重視する根底には高校生クイズの優勝経験がある。牛久は「うちのチームは1人が突出していたわけではなく、3人の得意分野が分かれ、うまくかみ合っていた。誰一人欠けても優勝できなかった」と断言する。戦う舞台をクイズからAIに変え、国内の研究者と手を取り合い、世界のトップを狙っている。＝敬称略（科学技術部 大越優樹）

障害者の介護者、4割が60歳以上 宇都宮市アンケートで判明

下野新聞 2018年1月25日

【宇都宮】障害者を介護する人のうち、家族が6割を占め、4割が60歳以上。市が次期市障がい者福祉プランの作成に向け、障害福祉サービスなどの利用者を対象に本年度実施したアンケートでこんな状況が明らかになった。日常生活などで困っていることでは「将来の生活」についてが最多の51・3%に上り、市は介護者である親がいなくなった後も障害者が地域で安心して生活できるよう、支援体制の充実に取り組む考えだ。

アンケートは昨春、3241人を無作為抽出して行い、1938人が回答した。60歳以

上の介護者は44・4%で76・1%が女性だった。介護者の年齢は高く、市は「年老いた親が自分の死後、障害者の子の将来に不安を感じている現状もうかがえる」としている。

市は24日までに、障害者施策全般の目標を定めた第5次市障がい者福祉プラン（18～23年度）、障害福祉サービスの必要量や目標値を定めた第5次市障がい福祉サービス計画（18～20年度）、第1期市障がい児福祉サービス計画の素案を策定。

福祉プランではアンケートなどを踏まえ、重点的に取り組む「子育て・子育て支援」（幼年、児童期）、「地域生活移行・継続」（壮年期）の2プロジェクトを設定。親などの介護者がいなくなった後や地域生活への移行に備え、グループホームの設置促進や相談体制の充実、地域生活体験の促進などを掲げた。通学・通所に伴う移動支援の推進にも取り組む。

大江健三郎「個人的な体験」と障害児の受容

読売新聞 2018年1月25日

私の友人の医師は、ある総合病院の新生児科で20年勤めました。その間、毎年10人以上のダウン症の赤ちゃんが新生児科に入院してきたそうです。総計で約200人です。そのうちの1人の母親は、「私には無理」と宣言して一切面会に現れませんでした。その赤ちゃんは、祖父母が引き取って育てています。この親は、わが子の障害を受容できなかったのでしょうか？ そうかもしれません。けれども、もしかすると、あと何年かすれば受容する心が芽生えるかもしれません。「受容には時間がかかる」というのが、私がこれまでに多くの障害児の家族を見てきた結論です。

現実を直視しない主人公

作家の大江健三郎は、1960年代に小説「個人的な体験」と、これに続く「万延元年のフットボール」を発表し、ノーベル文学賞を受賞しました。私にとって「個人的な体験」は、青年期に読んだ忘れられない鮮烈な作品です。

大江健三郎には知的障害を持ったご子息がいます。生まれつき後頭部が瘤状に膨らみ脳がはみ出していたのです。医学的には脳瘤と呼ばれます。「個人的な体験」は私小説ではありませんが、脳瘤を持って生まれて来た赤ちゃんの受容がテーマです。



【名畑文巨のまなざし】

真ん中の男の子はダウン症。いつもおどけて人を笑わせようとする、とても元気で明るい子で、ファインダーをのぞいていると心が洗われていくような感覚がありました。きっと、この子の心はとてもきれいで純粋なんだなと思いました。3人のお姉ちゃんたちも彼が大好きだし、ご家族は本当に仲が良く、ひょっとしたら彼がいることで家族がまとまっているのかな？ そんな気がしました。南アフリカ共和国プレトリア市にて

現実を直視しない主人公は、奥さんが妊娠しているのにアフリカへ旅することを夢見ていたりします。障害児が生まれてくると、自分の子どもを「怪物」と表現します。つまりわが子を完全に拒んでいるのですね。義母も同様です。受け入れようとしない。さらに産科医までが「この赤ちゃんは早く死ぬほうがいいだろう」と言い放ちます。

主人公は自分の子どもにも自分の人生にも真正面から向き合おうとはしません。だから障害児が生まれたことを「罰」と受け止めます。これでは受容などできません。それが昂じて自分と赤ちゃんの関係を、「生涯の最初で最大の敵」と考えるに至ります。

心は「遠回り」「一步後退」を繰り返す

なかなか死なない赤ちゃんを見て、主人公はわが子を死なせてくれる医師のもとへ連れて行きます。これもある意味では大変無責任で、他人の力によって自分の困難を解決してもらおうと思っているわけです。しかし、赤ちゃんの生と死の究極の場面で、父親はある結論に到達します。

「欺瞞なしの方法は、自分の手で直接に縊り殺すか、あるいは、かれをひきうけて育ててゆくかの、ふたつしかない」と。

これが主人公にとっての受容の第一歩でした。この長編小説の最後の数ページで突如受容するのです。それも何か特別なきっかけがあったわけではありません。つまり受容には時間がかかり、他人からの説得などの明確な転機があるのではなく、自然とそういう心が芽生えることを「個人的な体験」は表現したかったのではないのでしょうか？

最後の場面では、主人公の義父母が完全に赤ちゃんを受け入れています。赤ちゃんの死を望んだ義母が、なぜ簡単に障害を受容してしまったのでしょうか？それはおそらくこの受容が「真の受容」ではなく、「仮の受容」だからです。

私たちの受容の心は一直線には進みません。らせんを描くように遠回りしたり、一步進んで一步後退したりしながら進んでいきます。その証拠に、「万延元年のフットボール」では、主人公は障害児のわが子を拒んでいるのです。「個人的な体験」と「万延元年のフットボール」はまったく別の作品ですが、時間が経ってから受容が挫折しているというところに真理があると感じられます。

受容を遅らせる周囲の差別

障害児の受容に関して「個人的な体験」に書かれていないことが一つだけあります。それは、他者からの差別の目が受容を遅らせるという視点です。障害児を取り巻く環境は少しずつ改善されていることは間違いありませんが、現在でも障害児を差別する人間がいる現実を否定しようがありません。だからこそ障害児の受容は困難で、大江健三郎も「万延元年のフットボール」で簡単ではない現実を描いたのだと思います。

受容は「あきらめ」から始まることが多いようです。それはやがて「克服」に変化します。そして両親は「新しい価値観を構築」して、最後にはわが子を「承認」することが多いように見えます。私は微力ではありますが、そういう両親の努力に対して手を貸すことができたらうれしいと思っています。

ここまでの連載では、障害や病気を生まれもってきたわが子を受容した家族と、できなかった家族の姿を描いてきました。次回からは、障害や病気のあまりの重さに、医者が治療をすることに悩んだり迷ったりした場面について書いていく予定です。(松永正訓 小児外科医)

長野) ひきこもり新聞編集長が講演「第三者の介入重要」 関口佳代子

朝日新聞 2018年1月25日



講演する木村ナオヒロさん＝長野市

ひきこもりの当事者の声を集めて発信する「ひきこもり新聞」の木村ナオヒロ編集長(33)が21日、長野市障害者福祉センターで講演した。ひきこもりの経験や支援のあり方について話し、当事者や親、支援に関わる人など40人ほどが耳を傾けた。

主催は、不登校の子どもの居場所づくりや親の会を開く市民グループ「ブルースカイ(登校拒否を考える親と子の会)」(長野市)。10年ほど前からひきこもりの相談が増えてきたことから企画した。

木村さんは大学を卒業後、弁護士になろうと司法試験の合格を目指した。もともと人付き合いが得意ではなかったことから自宅で勉強したが、30歳を過ぎて合格せず焦りは募った。就職をめぐる家族と対立し、父親を殴るなど暴力行為にまでおよんだ。耐えかねた家族の紹介で、ひきこもりに詳しい精神科医の斎藤環氏と知り合った。

【寝屋川監禁】愛里さんの両親、障害年金1千万円受給 識者「行政、異変気づけた」

産経新聞 2018年1月24日



監禁されていた33歳長女の遺体が見つかった住宅 = 25日夜、大阪府寝屋川市

今回起訴された両親は統合失調症の娘を隠し、地元自治体にも支援を求めなかった。一方で障害年金は受給し、これまで1千万円以上を受け取っていた。

居住地の大阪府寝屋川市は「サポートが必要な家庭と把握するのは困難だった」としているが、立命館大の山本耕平教授（福祉臨床論）は「行政側は、どこかのタイミングで異変に気づくことができた」と指摘する。

複数医師の診断記録や年金受給の事実があったことを踏まえ、「児童虐待の場合のように診断した医師が情報を提供するような仕組みづくりも考えるべきだ。年金事務所と自治体が連携すれば、年金受給は知ることができた」とし、「障害者がいる家庭を、行政側から把握可能とするシステムを何重にもつくるのが大切だ」と話した。

発達障害者の免許取得支援 新プログラム開始へ講習会

NHK ニュース 2018年1月24日



学習に時間がかかるなど発達障害がある人たちの運転免許の取得を支援して、社会参加につなげてもらおうと全国の5つの自動車教習所が、ことし春から新たな教習のプログラムを始めることになり、担当者向けの講習会が開かれました。

23日東京・港区で開かれた講習会には、熊本や三重、岩手などの全国5つの自動車教習所から8人が出席しました。

はじめに全国に先駆けて取り組んでいる栃木県鹿沼市の自動車教習所の古澤正巳社長が、「発達障害の人にとって、教習所は敷居が高いという意見が聞かれる。支援の取り組みを全国に普及させたい」とあいさつしました。

発達障害の人が免許を取って運転することに法律上問題はありますが、学習に時間がかかったり、コミュニケーションがうまく取れなかったりして、教習所での実技や授業についていくのが難しいケースもあります。

講習会では、鹿沼市の教習所の担当者が、福祉の専門家を配置し、一人一人の障害に合わせて個別にサポートしていることや発達障害がある教習生と接するための指導員の研修方法などについて説明しました。

出席した熊本県の教習所の社長は、「先進的な取り組みを持ち帰って、発達障害の人に社会進出の手立てとして使っていただきたい」と話していました。

5つの教習所では、ことし4月以降順次新たなプログラムを始めることにしています。

栃木) 児童虐待訴えティッシュ配り 親子バンドが啓発 朝日新聞 2018年1月25日

児童虐待撲滅を訴えながら音楽活動を続ける親子ロックバンド「Crazy Zephyr (クレイジーゼフィール)」のTOMOYAさんとMireさんが24日、宇都宮市のバンバ広場前で啓発のためのティッシュを配った。児童虐待防止通報ダイヤルが印刷されており、TOMOYAさんは「子どもたちを守っていきましょう」と道行く人たちに声を掛けた。

TOMOYAさんは小さい頃に、遠い親戚の家などをたらい回しにされながら育った経験がある。すさんだ時期もあったが10代の時に音楽と出会い、音楽仲間や地域の人たちに助けられながらライブ活動を続けてきた。活動は今年で14年目で、2016年からは虐待防止イベントを開始。「私のように不幸な子ども時代を過ごす子どもをなくそう」と訴え続ける。通行人に「子どもたちを守りましょう」と呼びかけながらティッシュを配るTOMOYAさん(右)とMireさん(中央)＝宇都宮市馬場通り4丁目



と呼びかけながらティッシュを配るTOMOYAさん(右)とMireさん(中央)＝宇都宮市馬場通り4丁目

ティッシュに刷られている全国共通ダイヤル「189(いちはやく)」は近くの児童相談所につながり、専門家が対応する。TOMOYAさんは「虐待によって子どもの命が奪われるケースが増えている。おかしいなと思ったら迷わず電話してほしい」と話している。(佐藤太郎)

生活保護費の不正受給、過去最多の4万4千件 厚労省 日本経済新聞 2018年1月24日

厚生労働省は24日までに、2016年度の生活保護費の不正受給の件数が4万4466件となり、過去最多を更新したと公表した。件数の増加は2年連続で、前年度と比べ1.2%増えた。14年施行の改正生活保護法で、福祉事務所の調査権限を拡大し、受給者の収入調査が徹底して行われている効果が出ていると、厚労省は分析している。

生活保護費は、国が定める最低生活費から収入を引いた額が毎月支給される。不正内容の内訳をみると、働いて得た収入の無申告が2万800件(46.8%)で最多。年金などの無申告が7632件(17.2%)、働いて得た収入の過少申告が5632件(12.7%)という順だった。

一方、不正受給の合計額は167億円で前年度と比べ1.3%減った。1件当たりの金額は1万円減の37万7千円で、厚労省が把握する1997年度以降で最低となった。福祉事務所が受給者への収入調査を強化し、早期に不正が見つかることで、1件当たりの金額の減少が続いている。

本社企画「イマジン」に優秀賞 新聞労連ジャーナリズム大賞

新潟日報 2018年1月24日

新聞労連は23日、第22回新聞労連ジャーナリズム大賞の授賞式を東京・台東区民会館で行い、優秀賞に選ばれた新潟日报社の長期企画「イマジン—ともに生きたい」などを表彰した。

式典では、選考委員でルポライターの鎌田慧さんが「一言で『障害者問題』と言ってもなかなか理解されない中、障害者一人一人を掘り起こして理解を促している」と評価した。

取材班を代表して、東京支社報道部の阿部慎一デスクが表彰状を受け取り、「今後とも息の長い報道をして、問題提起していきたい」と述べた。

「イマジン」は、2016年7月に起きた相模原市障害者施設殺傷事件を受け、17年1月から7月まで新潟日報に掲載した。障害者の日常生活を丹念に取り上げ、誰もが暮らしやすい社会の実現を呼び掛けた。

ジャーナリズム大賞は、平和・民主主義の確立や言論・報道の自由などに貢献した記事を対象にしている。森友学園への国有地売却、加計(かけ)学園の獣医学部新設を巡る一連の報道で大賞に選ばれた朝日新聞の担当者らも表彰を受けた。

新潟日報社は長期企画「イマジン」をまとめた冊子を、数量限定で希望者に配布しています。申し込みは郵送先を記入の上、〒950-8535、新潟市中央区万代3の1の1、新潟日報社ふれあい事業部「イマジン冊子係」、またはファクス、025（385）7446。

「笑顔が見えマスク」春日井商高生が開発



中日新聞 2018年1月25日
オリジナルマスクを製作した水谷さん(左)、吉田さん(中)、川瀬さん。マスクは(左から)「にこっと笑顔が見えマスク」、「おじばあちゃんマスク」、「フェイスシャッターマスク」
=春日井市の春日井商業高で

春日井市の春日井商業高校の生徒が、豊橋市の業務用メッシュ製造会社「くればあ」と協力し、三種のオリジナルマスクを開発した。今後、ショッピングセンターでの販売や生徒たちによる訪問販売などを検討している。

商品市場や消費者動向についての知識を深める授業「商品開発」の一環で、二年生三十人が昨年四月から週三時間取り組んできた。

生徒のアイデアを取り入れた商品は、(1) 密閉性を重視した「おじばあちゃんマスク」(2) 折り畳み式で顔全体を覆うことができるアイマスク「フェイスシャッターマスク」(3) 半透明で口元が見えて表情が分かる「にこっと笑顔が見えマスク」の三種類。おじばあちゃんマスクは従来ある高性能マスクの機能はそのまま、表面に生徒たちが選んだ花や動物など四タイプの柄を入れた。

商品開発に当たり、スポーツ選手が風邪を防ぐために、くればあ社のマスクを着用していることをテレビで知った国際ビジネス科の水谷優歌さん(17)が同社に協力を求め、了解を得た。

授業では、生徒たちが「どの層に向けて、どんなマスクにするのか」のアイデアを持ち寄り、話し合いで決めた。くればあ社の社員にサンプルを作ってもらいながら試行錯誤を重ね、昨年十二月に完成した。

「笑顔が見えマスク」はメッシュ素材で、介護施設などの職員向けだ。水谷さんは「透明にこだわりすぎると素通しとなってしまい、マスクとして意味がなくなるので、調整が大変だった」。

出張する会社員向けの「フェイスシャッターマスク」を担当した情報会計科の川瀬若菜さん(17)は「実際に着けてみて息苦しくないか、コストを抑えるにはどうすればいいかなどいろんなことを考えないといけなかった」と苦労した点を語る。

国際ビジネス科の吉田桃菜さん(16)は「商品開発では、常に消費者のことを考えないといけないことを学べた」と自身の成長を実感。パティシエを目指すという水谷さんは「ケーキを作るときに今回の経験を生かしたい」。今後に向けた意欲を見せた。

放射性物質セシウムや微小粒子状物質「PM2.5」も99%除去できる高性能のおじばあちゃんマスクは九千九百八十円(税込み)。フェイスシャッターマスク、にこっと笑顔が見えマスク(五枚入り)は二千九百八十円(税込み)。(丸山耀平)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行